岩瀬文庫本『法然上人伝』について

小山正文

一

愛知県西尾市の市立図書館には、西三河の一富豪家であった肥料商岩瀬弥助（一八六七―一九三〇）氏の収集になる古写本、古版本、名家自筆本等多数の貴重図書を収蔵する有名な岩瀬文庫がある。[1]

昭和十一（一九三六）年刊行の『岩瀬文庫図書目録』[2]によると、同文庫にはつぎのような『法然上人伝』五冊を蔵する。

法然上人伝　五　㊟　元禄五年　六八　一〇三

これは昭和四十五（一九七〇）年の『国書総目録』[3]にいう

法然上人伝　㊝伝記　㊟岩瀬（永禄五写五冊）（二冊）

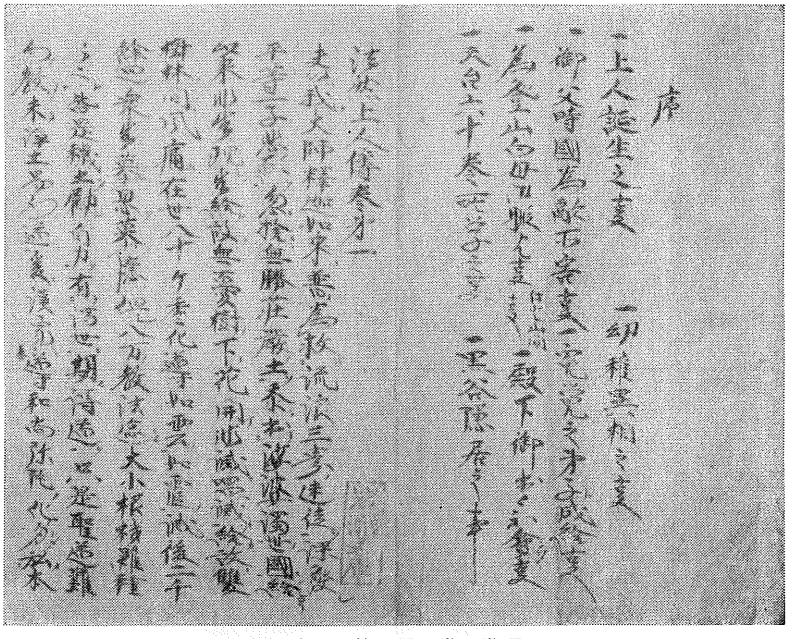
の五冊本に相当するものであろう。しかし、この場合斯本は前者のごとく元禄五（一六九二）年の写本なのか、それとも後者の永禄五（一五六二）年が正しいのか、また同名の『法然上人伝』十巻（いわゆる『十巻伝』）との関係はど

うなのか(後者は『十巻伝』と別掲する)、などの諸点が不明瞭である。そこで西尾市立図書館に原本をたずね実査したところ、両目録とも一部誤っていることが判明した。

すなわち岩瀬文庫本『法然上人伝』は、まごうかたなき永禄五年の書写なるいわゆる『十巻伝』で、しかも同本には従来まったく知られなかった重要な識語も写されていて、きわめて注目すべき写本と認められたのである。よってここにその概要を記し、若干の卑見をつけくわえることとしたい。

二

西尾市立図書館蔵岩瀬文庫本『法然上人伝』は、前記のごとく図書番号六八―一〇三で袋綴五冊よりなる。各冊の渋茶色紙表紙は江戸時代中期の後補と目されるが、その左上部に書冊の順を示す「一二」、「三四」、「五六」、「七八」、「九十」の墨書があり、もって本書が一冊二巻宛写されていることが知られる。大きさはタテ二十五・二センチ、ヨコ十六・四センチを計り、半葉八行、一行十八字内外で各冊初葉右下へ「岩瀬文庫」の朱印を押す。紙数は第一冊五十四葉、第二冊四十八葉、第三冊四十葉、第四冊五十七葉、第五冊四十四葉を数え、紙質は薄手の楮紙とおもわれるものを使っている。各巻はじめに「法然上人伝巻第一」以下十までの同様首題を置くも、外題・撰号・尾題等は一切みられない。巻一から巻八までの首題前葉余白には、該当巻の目録を記載しているが、それははじめに密でおわりに粗となっており、かつ目録はすでに本文の各段最初に必ず付されているところをみると、これは後日便宜のため記入したもので、元来はなかったものとおもわれる。



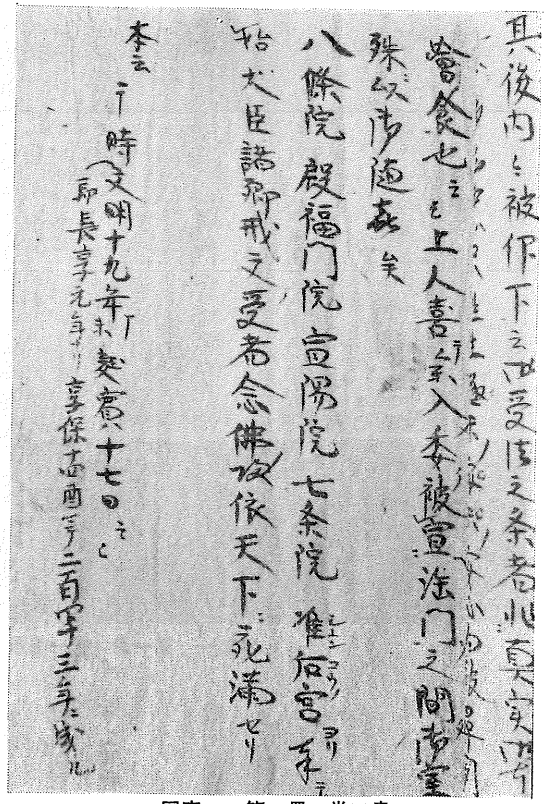
写真一　第一冊　巻一巻頭

当本の本文はすべて漢文体で、それに返り点や送りがなが施され漢字にはまままふりがなもついている。書体はやや右下りの特徴ある文字で、どちらかといえば稚拙なところがあって誤字も多いが、誤字には書写とあまりへだたらないころの訂正が朱筆でもっておこなわれている。本書全体の筆風は紙質墨色とあいまち室町後期とみるべきであろう（写真一）。

かくて岩瀬文庫本『法然上人伝』は、首題・巻数・目録・漢文体の本文よりして、これが『法然上人伝』十巻（『十巻伝』）であることはほぼ誤りないものの念のため現行本[4]と対校してみたところやはり完全に一致した。

三

岩瀬文庫本『法然上人伝』には、第一冊を除く



写真二　第二冊　巻三奥

各冊に系統や伝来、あるいは筆写年時や書写の場所を示す貴重な識語類があるので、つぎにそれらを順次検討していきたい。

まず第二冊巻三の末尾に本文と同筆をもって

本云　于時文明十九年丁未蕤賓十七日云々

とあり、これに

即長享元年ヨリ享保十四酉マテ二百四十三年ニ成ル

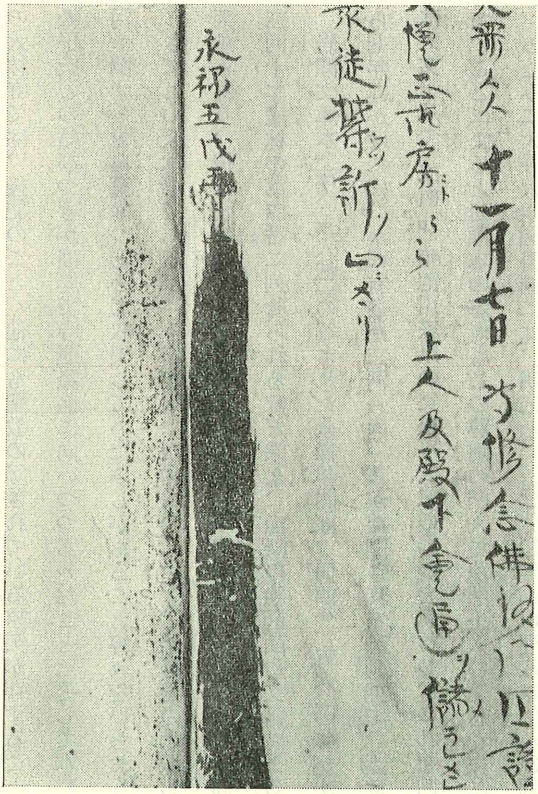
という享保十四(一七二九)年の注記が施されている(写真二)。もって岩瀬文庫本も現行本『十巻伝』同様、文明十九(一四八七)年本系の一写本であることが判明したわけだが、特にこの文明十九年蕤賓(スイヒンは旧暦五月の異名)の識語は、従来の現行本には全然みられなかったものだけに重要で、このへんについてはのちほど詳しくふれる。

ついで第三冊巻六の終りには、岩瀬本の書写年月と写された場所およびその筆者名を記す、これまた逸すること

のできない貴重な一行がしたためられているものの、残念ながらその四分の三ほどが墨で抹消されており、辛じて判読しえたところを記載すると大体つぎのようであるが、かんじんの筆者名を明らかにしえないのはなんとしても惜しい(写真三)。すなわち、

永禄五戊五月四日於大林寺方丈書写畢　生年□□　三六歳

しかし、これによって岩瀬本が永禄五(一五六二)年五月大林寺方丈において、生年三六すなわち十八歳の某者が書写したものであることが明確となったのはさいわいで、この事実はさきに指摘した室町後期の書風と筆体の稚拙さに照応するものといわねばならない。



写真三　第三冊　巻六奥

岩瀬本の写された場所大林寺は、おそらくいまも岡崎市魚町にある浄土宗西山深草派大林寺のことかとおもわれる。その根拠は薄弱ながら、『十巻伝』が古く三河の西山派で重用されたこと。室町時代

の大林寺では、後記のごとく他にも聖教の写されている事実が存すること。永禄年間の大林寺は、すでに戦国大名松平氏との結びつきが濃厚で寺運隆盛に向いつつあったこと。そして本書を最終的に入手した故岩瀬弥助氏は、三河に関する古典籍はつとめて収集していたふしがあること等々をいちおうあげておこう。

さてこの大林寺であるが、その開山は永和四（一三七八）年静見の勘録した『法水分流記』[5]の補筆[6]によれば、良倪天盈とあり、彼は岡崎城主松平信員の屈請により明応二（一四九三）年に同寺を開いたという。[7]その後江戸時代には三河十二壇林の第四番[8]に列せられるほど栄え、当時の絵図面や文書によると本堂東方に方丈もみえる。[9]

岩瀬文庫本『法然上人伝』の写された永禄年間は、同四（一五六一）年が法然上人三百五十回忌、六（一五六三）年から七年にかけては、かの有名な三河一向一揆が展開される激動期で、[10]大林寺は第三世照翁尊阿の代にあたる。尊阿は天文十八（一五四九）年徳川家康の父松平広忠の葬儀を執行し、これを同寺に葬るという歴史的な役割を果した僧で、ことによると岩瀬本の筆者もこの尊阿の門人で法然上人の遠忌を機にこれを写したのかもしれない。

ちなみに大谷大学図書館には、明応七（一四九八）年から翌八年にかけ岡崎大林寺で書写された『観無量寿経四帖疏深草抄』を蔵するが、[11]これは同寺開創まもないころの写本として注目される一方、書写のなった明応八（一四九九）年は、開山天盈良倪の没した年としても意義ぶかいのでついでをもって本抄につき若干ふれておく。

周知のように『深草抄』十巻は、善慧房証空の門人立信房円空が文永十（一二七三）年深草真宗院において講述したものを、直弟の道教顕恵が記録した聖教で『玄義分抄』四巻、『序分義抄』二巻、『定善義聞書』三巻、『散善義抄』一巻の計十巻よりなるが、このうち谷大図書館本は『玄義分抄』の第一と『定善義聞書』の第二を惜しくも

欠いている。『深草抄』は証空上人相伝の義を五百九十三箇条の問答体であげ、釈迦弥陀二尊の教義を決定した西山深草派の根本聖典で、岡崎市円福寺蔵本にはつぎのような奥書が写されており、[12]もって這般の事情をしることができる。

文永十年十二月於深草道場右筆云云是則依師命之難背且応発起御願以当座目録註筆紙者也恐其言拙其義脱再怡期後日輙不可及外見歟一見之後者必可被返本所云云其義尤可宜同縁同行之中若一見之人紀是非顕其是必々可称南無阿弥陀仏給也

谷大図書館本は前記のごとく二冊を欠くが、嘉元四(一三〇六)年の本を底本とする恐らく現存最古の写本で、袋綴タテ二十六・一センチ、ヨコ十八・一センチ、半葉八行・一行二十三字、漢文の本文には返り点、送りがなを施し奥に次掲のごとき識語を置く。

於後日同学与明感法師一校合畢

写本云

嘉元四年十月八日於樋口大宮之寺書写畢此是秘抄也不可外見云云

右此抄十巻者四帖之疋之末抄也

作者深草立信上人筆授竹林寺道教上人云云

然間汲其流族盍計其源矣肆愚若為深草末流者也依之雖為天下无双之悪筆且為今世之冥加且為当来之資糧書写之而頂戴之矣於後日披見之輩者障悪筆誹謗之言而可有専称仏号者也云云

右此本者従崇福寺令恩借書写之従明応七年極月上旬之比立筆於次之明応八蕤賓上旬之比諸願成就者也

三川国額田郡東矢作岡崎郷大林精舎南面療中

沙門猷穢欣浄舜禎（花押）生年廿六才

これによって明らかなごとく、谷大本『深草抄』の筆者は舜禎と知られるのであるが、彼にはこれよりのち九年の永正四（一五〇七）年に書写せる『沙石集』の抄本が、岡崎市満性寺に蔵せられていること本誌前号の織田顕信氏の論文に紹介されているとおりである。[13]

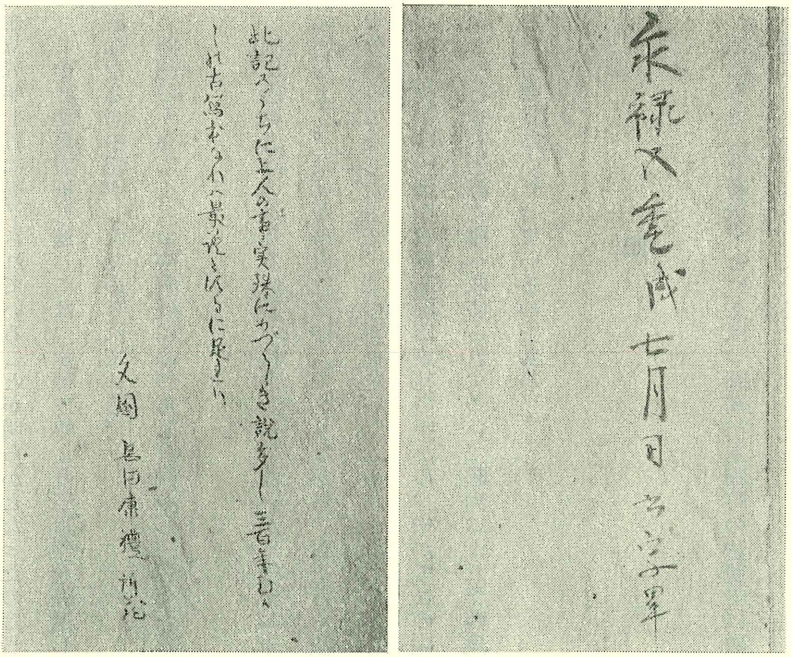
ともあれ大林寺は、かくのごとく早くより聖教に親しむ寺であったことは留意され、もって岩瀬文庫本『法然上人伝』の筆写場所大林寺も、ここにあてる可能性の大いなる点が知られたかと思う。

大林寺に関しおもわぬ紙数を費したが、論をもとにもどし岩瀬文庫本『法然上人伝』には、右の大林寺識語に続き第四冊巻八末にも墨で抹消された短い二行がある。この方は「学」らしい一字を除いてまったく読めないが、それが本文と明らかに別筆であるところよりすれば、あるいは所有者名でも記されていたものであろうか。いずれにしても短行ゆえさして重視さるべき墨書でないと判断される。右の次葉は裏表紙の見返し部分にあたるが、ここにも

壬午七月七日

請取申し候

という本書のある期における移動を意味する文字がある。岩瀬文庫本が写された永禄五（一五六二）年以降、同文



写真四　第五冊　巻十奥

庫にそれが収められるまでの壬午年といえば、天正十（一五八二）年、寛永十九（一六四二）年、元禄十五（一七〇二）年、宝暦十二（一七六二）年、文政五（一八二二）年、明治十五（一八八二）年の前後六回を数えることができるけれども、いまの場合は墨色より推量して文政五年をあてたいところであるが臆測の域を出ない。

最後に第五冊巻十の終末にある識語をみておくと、ここにもやはり本書が永禄五年に写された旨の奥書があって、第三冊巻六のそれとともに重視される（写真四）。すなわち

永禄五季戊七月日書写畢

というものであるが、実はこれに続いて書かれていたであろうところの筆写場所や筆者名の一行は、遺憾ながら削除されてしまっいる。しかしともかく巻十のこの奥書によって、岩瀬本が

永禄五年七月に書了されていることが明らかとなったのは貴重といいわねばならない。

この次葉裏表紙見返しには、永禄五年より三百年を経過した幕末文久（一八六一―三）頃に、本書を所蔵した岡田康礼なる者の記がしたためられている。

此記のうちに上人の事実殊にめづらしき説多し三百年むかしの古写本なれハ最証とするに足れり

文□　岡田康礼　所蔵

岡田康礼とはいかなる経歴の持主か知らないが、彼が『十巻伝』を殊にめづらしき説多しと記したのは注目にあたいしよう。なぜなら康礼は俗人でありながら、おそらく法然上人伝の決定版ともいうべき『四十八巻伝』などを十分読みこなした上で、この言を吐いたともおもわれるからである。

本書流伝の一端を物語る岡田康礼の手から、やがてこの『十巻伝』は離れ市場に流出して、岩瀬弥助氏の求めるところとなり岩瀬文庫へ収められ、ついで昭和二十八年西尾市に同文庫は接収、さらに同三十年市立図書館へ移管なって今日にいたっているのである。

四

ところで『十巻伝』といえば、岡崎市本宿町の法蔵寺に次掲のような識語を有する一本をかつて蔵していたことが諸本によって知られている。[14]

（巻一）大永六年丙戌二月十四日

厭欣智湛判

彼伝記一部十巻令成就畢

（巻四）大永六年正月廿七日

（巻五）文明十九年丁未霜月七日

（巻八）于時大永六年初春中旬三日書写之

（巻九）于時大永六年丙戌正月十七日

（巻十）大永六年正月十八日

これらの識語より法蔵寺旧蔵本は、文明十九（一四八七）年に巻五が先ず写され、ついで大永六（一五二六）年に巻八、巻九、巻十、巻四、巻一の順で筆写が行われたと一般にいわれている。[15] しかしここで理解に苦しむのは、巻五の文明十九年と余巻の大永六年との間に四十年もの年差が存することであろう。

これについても種々先学によって会通が試みられているものゝ、いまだ納得せしめる解答に接しない。『十巻伝』に関する大きいこの謎も、しかし岩瀬文庫本の出現によって解決したといえるのではなかろうか。

すなわち『十巻伝』には、巻三奥に「于時文明十九年丁未蕤賓十七日」（岩瀬文庫本）、巻五奥に「文明十九年丁未霜月七日」（法蔵寺旧蔵本）の識語を有する先行本があって、それを四十年後の大永六（一五二六）年に智湛の筆写せるものが法蔵寺旧蔵本、七十六年後の永禄五（一五六二）年に書写されたのが岩瀬文庫本であったと理解するのが、

もっとも妥当な見解ではないかとおもう。

したがって両本は祖本を同じくするから、対校しても本文間に著しい相違をみなかったのもいわば当然であった。もっとも文明十九年の識語は、ふつういわれるような筆写や成立の年代を意味する奥書でないことは後述のとおりで、この点十分留意する要があろう。

ここで三河法蔵寺旧蔵本『十巻伝』の筆者智湛について、その感じたところを記しておきたい。智湛の伝は残念ながら不明というほかないが、彼が法然上人の伝記を写し、かつ厭欣と冠するところよりすれば、浄土僧であろうことは想像に難くない。そして智湛の『十巻伝』が法蔵寺に永く伝えられた事実は、同寺と同じく彼も西山深草派の流れをくんでいるのではないかとおもわしめる。

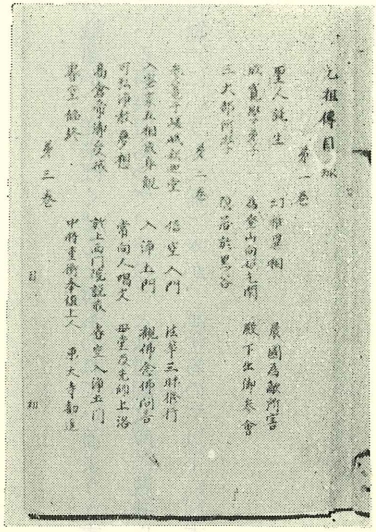
智湛が『十巻伝』を写した翌大永七(一五二七)年に、法蔵寺康翁写伝の永正七(一五一〇)年本『法水分流記』を三州深草沙門伝空賢智なる者が書写しているが[16]、この賢智と智湛は、時代的場所的に何か関係ありはしないだろうか。またこれよりやや前の文明二(一四七〇)年に、法蔵寺直末の岡崎市保母町胎蔵寺を開いた念空智観[17]、同じく明応六(一四九七)年に岩瀬文庫蔵文保本『太子伝』(図書番号一二七―一一〇)を写した三州法蔵寺智伝[18]等は、智湛、賢智とともに「智」字のつくところから親しい間柄にあるのでないかと推測せしめる。ここで法蔵寺庫裡に現存する明応七(一四九八)年の梵鐘銘[19]をみよう。

奉鋳懸洪鐘
三河国額田郡中

山中郷八王子山
法蔵寺第三世之
住顕恵比丘并道俗
之念仏衆等勧
十方旦那而
奉鋳所如件
明応七戊午年霜月十七日
願主敬白
大工藤原氏兼峰

さきにみた文明二(一四七〇)年の智観、明応六(一四九七)年の智伝、大永六(一五二六)年の智湛、同七(一五二七)年の賢智などは、いずれも右の鐘銘にみえる法蔵寺念仏衆の一員でなかったかと、ひそかにおもいをめぐらすのであるが、もとよりいたずらな臆測はさしひかえなければなるまい。

ちなみにいう、法蔵寺智伝の写した文保本『太子伝』が、初期真宗で行われた『正(聖)法輪蔵』と密接な関係にあることは興味深く、[20] また智湛が筆写した『十巻伝』も、真宗の法然聖人掛幅絵伝と親縁関係にあることは無視できない。かかる事象の背後には、室町時代における三河真宗教団の聖徳太子や法然聖人絵伝絵解きの影響を没却すべきでなかろう。



写真五　元祖伝目録(一)

五

最後に『十巻伝』の成立問題について一言しておきたい。これに関しかつて宝田正道氏は、前掲法蔵寺旧蔵本『十巻伝』の識語から次のようにいわれた[21]。

「これは文明年間にできていた伝記と、古来のある伝記（『知恩伝』ではあるまいか）とを大永年間に智湛という者が合糅書写して十巻としたものではなかろうか。」

この考えはしかし岩瀬文庫本『十巻伝』の出現によって、訂正を余儀なくされるであろう。なんとならば文明十九（一四八七）年の時点において、現行本『十巻伝』はすでに成立していたことが、既述のとおり明確となっているからである。

それよりもここでは注意を喚起したいのは、文明十九年の識語が、従来ばくぜんとおもわれているような書写や成立を示す年時ではなく、実に校合の行われた年を意味している事実であって、そのことは岩瀬文庫に蔵せられるいま一本の『十巻伝』[22]、すなわち最初に掲載した『国書総目録』にいう（二冊）本が、証するので以下に同本の概要を記載しよう。

○書名巻冊数

法然上人伝　十巻　上下二冊

○筆写年代

天保五年十一月

○装釘　表紙

袋綴　黒紙表紙　題簽あり

○寸法

タテ二十四　ヨコ十七・一センチ

○紙数

上冊七十二　下冊五十九

○半葉行数　一行字数

十二行　十七字

○外題

三河国十巻伝　上　三河国十巻伝　下

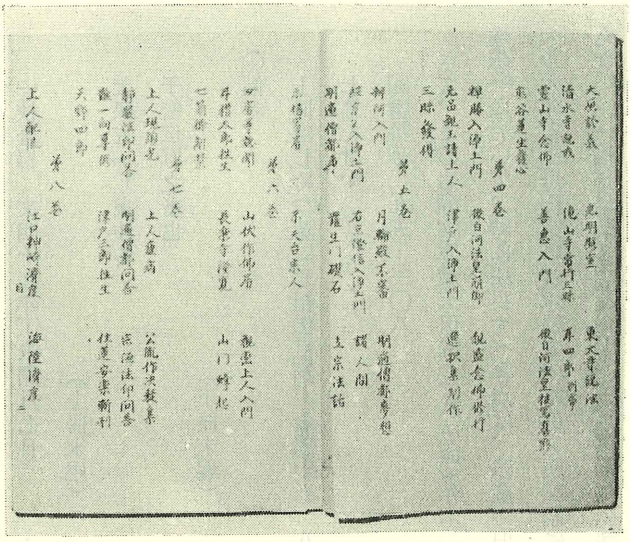
○首題

法然上人伝巻第一～同巻第十

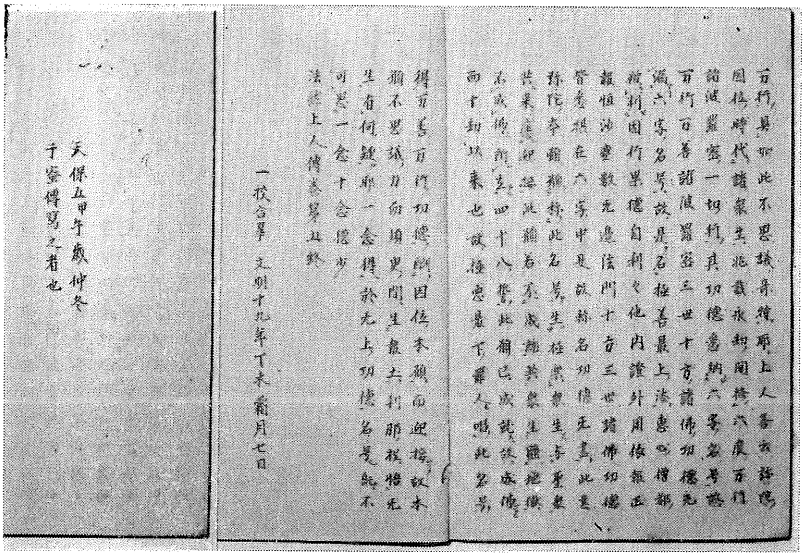
○尾題

法然上人伝巻第一終～同巻第十終

○転声



写真六　元祖伝目録(二)



写真七　天保本『十巻伝』奥書

返り点　送りがなあり

○奥書

一校合畢　文明十九年丁未霜月七日

（上冊末尾）

天保五甲午歳仲冬

于密伝写之者也

（下冊末尾）

○備考

上冊はじめ二葉に元祖伝目録　全部十巻　八十七篇を付す（写真五・六）

図書番号　九五―三〇八

さて、この岩瀬文庫蔵天保五（一八三四）年本『十巻伝』において、特に注目すべき点は、法蔵寺旧蔵大永六年本や岩瀬文庫蔵永禄五年本の文明識語にみえない「一校合畢」の文字であろう（写真七）。該本は天保五年という比較的あたらしい写本とはいえ、もともと文明の識語には「書写之」とか「写之畢」

などとは、一切書かれていないのであるから、やはりここは文字どおり校合をおえた年時とみるのが至当で、おそらく原本もかく記されていたにちがいなかろう。この推測を裏付けする史料が、大谷大学図書館と竜谷大学図書館に蔵せられる計六本の『十巻伝』写本である。

現在、大谷大学図書館には、図書番号宗大九四八（A）、宗大四三九九（B）、宗大四四〇〇（C）の『十巻伝』写本三本を蔵する。しかして（A）本は、書写年月不明なるも江戸時代後期の法蔵寺本系であることは一見して明らかであり、二巻一冊宛の五冊本構成をとる。

（B）本は乾坤二冊で、坤冊末尾に

文化元 申子 六月廿七日起筆七月六日

閣筆　　林庠

此書高浜恩任(寺脱か)ヨリ(借か)備用申処文字脱字異字大ニ損スナレモ愚昧ナカラ写序ニ直シ署者ナリ

とあり、三河高浜市恩任寺本を借用して、林庠なる人が文化元（一八〇四）年に書写したものである。同本は見開き二十六行の罫紙に十六字詰階書体で写しているが、大谷大学図書館には同形式の貴重典籍が、このほかにもすくなからず蔵せられており注目される。

（C）本も乾坤二冊よりなり、つぎの識語が最末に存する。

此書全部十巻合二冊上帛数凡五十丁下同四拾五丁上下合合帛数凡九十五張

此元祖御伝十巻者秘在三当国宝飯郡本宿村法蔵寺一軌本写誤甚多（シ）或延書雑（リ）入（ル）然（ラハ）正願寺閲雪師芳文意記処之以本写

寛政未歳初冬桑子山真我大和尚之御蔵本拝借校合（メ）改同中冬上旬枝畢

于時寛政六寅歳九月上旬（ヨリ）立筆初冬上旬第七日功具畢

これによって今本は、法蔵寺本系の正願寺（豊川市市田町正願寺か）閲雪本を底本とする寛政六（一七九四）年の写本で、さらに同十一（一七九九）年桑子山真我（妙源寺第二十四世円輪か）蔵本をもって校合したものであり、その筆者は当国とあるところより、三河の人であったことが判明する。

大谷大学図書館の以上三本に対し竜谷大学図書館にも、次にかかげるような三本の『十巻伝』が蔵される。それらの図書番号は、和大二九六五―一六一（D）、和大二九六五―一六二（E）、和大二九六五―一六三（F）で、まず（D）本は（A）本と同じく五冊よりなり、万延元（一八六〇）年に竜谷大学の前身である学林へ入蔵された本で、第一冊と第五冊の表紙見返しにその旨が記されている。すなわち、

万延元庚申受入蔵

兼主儀（江州）恵隠

知蔵（勢州）義教

（E）本は安永九（一七八〇）年の景耀玄智本を写した慧明の写本で、天保三（一八三二）年にやはり学林へ入蔵された本。二冊よりなり最末につぎの記がある。

（安永九年）
庚子夏六月下澣洛陽景耀師辱授予繙本三冊曰世称西山十巻伝者是也汝写以流布于世予便并受焉時偽（ママ）孟蘭盆会世事
粉雑曰亦不足以比雑（ママ）僧互競写之非啻乱行字不正恐後人不能読也会有道友岩井扇山者至曰孜々作何事予曰雖当聞西
山有此書未得染指思望如焦今也不図受之乎師抃（ママ）躍之至猶懐苅山之璞故忘労写之耳岂請他日蒙余沢功畢与之修書殻
以作謝裁之精微視之書写廉則宛然牟質虎皮而已然古徳之不失抑亦書架之栄也

虎域西法専含竜桑慧明誌

元祖聖人御伝世称三河法蔵寺有十巻此中挙我高祖聖人事　天保三壬夏入蔵之

看護普天乗音

最後の（F）本は、江戸後期の真宗史家として著名な玄智景耀の写本で、玄智は安永九（一七八〇）年に『十巻伝』の一写本を入手したが、写錯点誤多く校訂を加えたものであるという。この（F）本はすでにみた（E）本の祖本とおもわれるが、巻一から巻四までを上、残り六巻を中下に分つ『十巻伝』としては、きわめて異例の分冊形体をとっている。玄智の識語は上冊初葉につぎのごとくしたためられる。

安永九年庚子五月八日於京極書肆中野氏家購得此書合三冊世称三河山中法蔵寺十巻伝或称西山伝者是也第六（紙か）叙
吾大谷上人略伝与諸書所引符合作者名字製述年時並未詳唯第五巻尾書云一校畢文明十九年丁未霜月七日耳熟覧此
伝顛末典実同古徳伝怪異類明義集間有似舜昌伝者蓋居三伝之中而成一家者也原本多写錯点誤今電覧之次粗加校訂

畢庚子六月五日　　釈玄智景耀書

なお、安永七(一七七八)年に編せられた玄智の『浄土真宗教典志』巻三で[23]、彼はすでに『十巻伝』をつぎのごとく解説していたことは、右の識語とあいまちこのさい大いに注目されよう。

法然上人伝十巻

作者未レ詳三河山中法蔵寺蔵本世称二西山十巻伝一典実同二古徳伝一怪異類二正源明義鈔一間有レ似二舜昌伝一　〇第六　四右

載二吾祖略伝一

さて、以上列挙した大谷竜谷両大学図書館所蔵の『十巻伝』諸写本には、岩瀬文庫蔵天保本でみたと同様、巻五奥に「一校畢　文明十九年丁未霜月七日」という問題の識語が、(E)本を除いて明瞭に写されているのである。[24]この歴然とした事実は、法蔵寺旧蔵本もかく記されていたことを物語るものに外ならない。管見に入った江戸時代の『十巻伝』写本のほとんど全部に明記されていた「一校畢」の文字が忽然としてなくなるのは、むしろ現代の活字本[25]からというのが真相のようで、あらため活字本の与える影響と写本の重要性をおもいしらせる結果となった。

それはともかく、この文明十九年の校合に関しちなみに触れておくと、文明十九(一四八七)年はその七月二十日に長享と改元されているにもかかわらず、『十巻伝』の校合者は十一月に至っても依然旧年号を使用するのは不審で、ことによるとこの校合は三河あたりの地方で行われた可能性が高いかもしれない。

『十巻伝』はこのように文明年間すでに校合されなければならなかったほど普及していた事実は興味深く、このことはひいて『十巻伝』の成立が予想以上に早いことを告げるであろう。田村圓澄博士は、しかし『十巻伝』が京都知恩院所蔵の国宝『法然上人行状絵図』（『四十八巻伝』）以後のものであることをすでに指摘しておられる。[26] そしてこの『四十八巻伝』は、島田修二郎氏がみごと看破されたごとく、延慶四（一三一一）年の法然上人百回忌を期して作製されたとおもわれる『法然上人伝記絵巻』本末十八巻（いわゆる『九巻伝』）の絵を解体改編して組み入れ、最終的には南北朝時代に入ってから完成したものであった。[27] その時期は存覚上人没する応安六（一三七三）年以前であることは、同上人の『袖日記』における「黒谷四十八巻絵詞　杉原四半紙五行定」の記載から明らなところである。[28] したがって『十巻伝』も、当然この応安六年以降、校合のなされた文明十九年以前の約百年間に成立したことがいいうる。ここで当然顧慮されてくるのが、故井川定慶博士の『十巻伝』成立に関する説であろう。

井川博士は知恩院蔵法然上人七幅絵伝の内容が、同絵伝移入者の養鶴徹定師が早く指摘したと同様、『十巻伝』にあいちかい点を注目され、絵伝製作の時期を南北期末室町初期と推定して、『十巻伝』もそこまでさかのぼらせてもよかろうと提言されたのである。[29]

これはなかなかの卓見とおもうが、ただ問題ははたして知恩院本七幅絵伝を南北朝末室町初期の作品とみてよいかどうか。また絵伝と『十巻伝』は、絵伝にあって『十巻伝』にみないもの、あるいはその逆の場合も存し、両者必ずしも全同でない点が疑問として残る。そこでこのへんをつぎのように理解してはどうだろうか。すなわち、七幅絵伝は知恩院本以後知られるようになった安城市本證寺本（県文現存六幅）、岡崎市上宮寺本（市文現存四幅）

の存在によって、[30]やはり南北朝期の制作が認められる。いっぽう『十巻伝』には、宝田正道氏もいわれるように現行本『十巻伝』や『知恩伝』の原伝にあたるようなものが存在したのではなかろうか、[31]実はそれがとりもなおさず、絵伝を画くにあたってのテキストとなったものであり、かつは絵伝絵解きの台本でもあったと推考するのであるがいかがであろう。この点特に読者諸彦の忌憚なき御批判を仰ぎたくおもう。

以上　岩瀬文庫本『法然上人伝』十巻五冊をめぐって、ほしいままな考察を述べてきたが、法蔵寺本『十巻伝』の失われた現在、岩瀬本が現存最古の写本として今後注目されるようになれば幸いである。

註

1　岡田温『日本文庫めぐり』一四二頁。
2　同目録二八八頁。
3　同目録第七巻二八五頁。
4　井川定慶『法然上人伝全集』六四七頁―七三五頁。
5　『真宗史料集成』第七巻八一九頁。
6　この補筆は『法水分流記』の奥書識語より、永正七（一五一〇）年もしくは大永七（一五二七）年のことかと推定される。
7　浜島覚成「浄土宗西山深草派三河十二本山を中心として」岡崎地方史研究会『研究紀要』第四号五六頁。
8　石田茂作『三河名数』三八頁。
9　奥村玄祐『大林寺誌』口絵三、一八頁。
10　新行紀一『一向一揆の基礎構造』二六二頁によれば、同一揆の発端を永録五（一五六二）年秋とする可能性のあることを指摘している。
11　『大谷大学図書館第三和漢書分類目録』第一分冊三二一頁。宗甲八『観経四帖疏抄』八冊。

12 『仏書解説大辞典』第二巻一九一頁による。

13 織田顕信『沙石集』流伝余考―新出満性寺抄本をめぐって」『同朋仏教』第十三号八六頁。

14 『浄土宗全書』十七の二九八頁、三二五頁、三三二頁、三六一頁、三六八頁、三七七頁。井川定慶『法然上人伝全集』六五九頁、六八五頁、六九二頁、七二〇頁、七二七頁、七三五頁。

なお、法蔵寺本はいつのころにか失われ、現在同寺に蔵せられていないことを確認している。

15 宝田正道『日本仏教文化史攷』一九四頁。

田村圓澄『法然上人伝の研究』五八頁。

16 『真宗史料集成』第七巻八三四頁につぎのごとくある。

右此系図者一宗大綱也蒙法蔵寺康翁老之許可書写之訖（今イ）

大永七年丁亥八月二十七日於三州吉良庄

満国寺住居之時誌之畢

深草余風沙門　伝空賢智（四十六歳在判）

17 註7に同じ五二頁。

18 『岩瀬文庫図書目録』二八三頁所掲の『太子伝』奥につぎのごとくある。

明応六年九月廿六日誂智（三川法蔵寺）伝房令書写

19 坪井良平『日本古鐘銘集成』四〇一頁。

20 阿部隆一「室町以前成立聖徳太子伝記類書誌」『聖徳太子論集』五四四頁、五四七頁。

21 宝田正道『日本仏教文化史攷』一九四頁。

22 『岩瀬文庫図書目録』二八八頁。

23 『大日本仏教全書』仏教書籍目録第一の五二六頁。

24 (E) 本の祖本にあたる (F) 本にはこれが存するから、(E) 本は単に写さなかっただけであろう。なお岩瀬本は「一校合畢」とするも意味は同一であることはいうまでもない。

25 『浄土宗全書』が最初にこの文字を省き、『法然上人伝全集』もそのままこれを踏襲している。
26 田村圓澄『法然上人伝の研究』五九頁。
27 島田修二郎「知恩院本法然上人行状絵図」『日本絵巻物全集』第十三巻七頁―二六頁。
28 『真宗史料集成』第一巻九〇四頁。
29 井川定慶『法然上人絵伝の研究』九八頁、一八四頁。
30 小山正文「法然聖人掛幅絵伝について」『日本文化と浄土教論攷』三三九頁。
31 宝田正道『日本仏教文化史攷』一九〇頁。